

医療者の部屋から「子どもの部屋」へ：小児病棟処置室改装計画

上田 素子 井上 徳浩 竹村 司

近畿大学医学部小児科学教室

当科では、子どもの病院体験が、少しでも痛くなく、怖くなく、楽しいものになるよう、子どもの目線でサポートする専門職種、チャイルド・ライフ・スペシャリスト (Child Life Specialist ; CLS) が、HART プロジェクトに参加している。昨年、文芸学部芸術学科造形芸術専攻/岡本清文研究室とのコラボレーションのもと、小児病棟処置室の改装を行ったので、ここで紹介する。

処置室は、子どもが往々にして苦痛に直面する場である。しかしながら、以前の処置室は、医療者が処置を施すための部屋、学生が処置を学ぶための部屋として、大人の都合が優先されたものであった。多くの医療機器、医療用具、そして医療者であふれ、子どもを囲む景色は“痛そうなもの”ばかりで、子どもは、不安と恐怖に顔を引きつらせていた。そこで、プロジェクトを通して、医療者は既に見慣れてしまっているその医療環境を、改めて子どもの視点から捉えなおすことで、ただ雰囲気が良いだけに留まらず、子どもが検査や処置を乗り越えるための工

夫を備えた「子どものための部屋」を検討した。

天井に色鮮やかなビー玉が踊り子どもの五感を刺激する照明、包み込まれる感覚や心地良い手触りにこだわったベッド、そして家庭の子ども部屋をイメージした全体像など、改装を行い、処置室内の環境は大きく変化した。これまでには見られなかった、処置室で子どもと医療者が笑顔で遊ぶ光景も見られはじめた。

今回の改装により、子どものための環境の実現に向けた下地は整えられた。しかし一方で、改装後、医療者の視点が再び顔を出し、不必要な医療材料が積み上がったまま、血の付いた針や注射器までが見えたまま、白衣の人がひしめき合う処置室に、子どもが呼び入れられることが増えている現状もある。今後、医療者にとっては数ある処置の1つも、子どもにとっては人生初の大事件にもなりうることを認識しなおし、より子どもの視点を重視した部屋へ、改善を続けたいと考えている。